

わらいもの

伊豆泥男

「ふんがふんが」

使い古されたこんな駄洒落でも、藁井わらびの口から発せられれば、とたんあたりは爆笑に包まれる。藁井の周りには、常に笑いが絶えなかった。彼が何かアクシオンを起こすたびに、大したことではないのに笑いが起こった。いや、それどころではない。何もなくても、ただ教室にいるだけで、クラスを半分を呼吸困難に陥らせたこともあった。

藁井はこれを、神様がくれた才能だと思っていた。俺は他人を笑わせるために生まれてきたんだ。コメディアンこそが、俺の生きる道なんだ。そう考えた藁井は、高校を卒業しすぐに、芸人養成所へと殴りこんだ。

藁井の才能は、そこでも猛威を振るった。同じ養成生はもとより、講師の先生、果ては芸人の中では師匠と呼ばれる大御所までもを、腹の感覚がなくなるほど笑わせた。藁井の名は、瞬く間に業界に知れ渡った。

各芸能事務所で、藁井の争奪戦が始まった。天狗になった藁井は――

「ギャラ二割も天引きするなんてなめてんのか。最低でも九十五パーセントは俺の懐に入るようにしろ。話はそれからだ」

「休みは少なくとも週に三日は確保しろ。あと、午後九時から午前九時まで俺は働かねえから。それができねえなら、お宅の事務所にはいかねえ」

「マネージャーは美人にしろ」

などという若手にあるまじき無茶な要求をしていた。しかし、藁井の才能を知っている事務所側は、その要求を飲まざるを得なかった。

最も待遇の良い事務所に所属した藁井は、早速大々的なデビューを計画された。正月の夜七時から二時間生放送で、あの大御所たちを唸らせた超実力派芸人の新星として、大々的に売り出されるのだ。

そして正月本番当日。藁井はその日まで、全く練習と呼べるようなことをしてこなかった。藁井は自分の才能を信じ切っていたのだ。番組のオープニングが始まる。司会者が皆の期待をおおるようなセリフを言い、パネラーに呼ばれた、日本人なら誰もが知るような大御所たちが、藁井のことを褒めちぎる。テレビを見ていた人々は、藁井が出るのを今か今かと待っていた。

期待を膨らませるだけ膨らませ、遂に藁井が登場した。藁井の姿があらわになるだけで、スタジオは爆笑の渦に飲み込まれ

た。

『どーも藁井と申します』

そんなただの自己紹介だけでも、スタジオは腹を抱えて笑った。藁井は得意げになり、もつと笑わせてやろうと言葉を続けた。

「二ワトリの物まねします。こけこっこー」

「隣の家に囲いができたんだって。かつこいー」

「なんでやねーん」

どれもこれも、子供でも笑わないようなギャグばかり。それでもスタジオにいた司会者、大御所、観客たちは、笑わずにはいられなかった。俺のデビューは大成功だ。そう思った藁井は、自分でも高笑いをした。

しかし翌日、事態は一転した。

気持ちよく目覚めた藁井は、昨日の番組の評判はどうだったかを確かめるべく、パソコンを開いた。が、SNSや掲示板に書かれていたのは、罵詈雑言の嵐だった。スタジオでは爆笑をかっさらった藁井のギャグは、視聴者には全く受けていなかったのだ。

『正月特番だからと期待したのに、なんだこの茶番は』

『こんなつまらない奴を売り出そうとするなんて、テレビももう終わりだな』

過去に類を見ないほどの酷評は、もちろん業界にも広まった。テレビ局や推薦した大御所の面目は丸つぶれである。とんでもない恥をかかされた、業界全体が手のひらを返した。各メディア

アが藁井をバッシングした。藁井は、一夜にして天国から地獄へと突き落とされた。

もちろん、藁井の能力がなくなったわけではなかった。現に今でも、彼の前で笑い出さずにいられる者はいなかった。ただ、電波に乗るとその面白さが失われるというのが判明しただけだった。

藁井は、これまでのように自分の才能を信じられなくなってしまった。どころか、不気味にさえ思えてきた。藁井をつまらない三流芸人だとき下ろす記事を書いたものでさえ、藁井が面と向かって話をする、たちまち笑い出すのだ。空恐ろしくなった藁井は、笑いに関する研究を行っている機関に、調査を依頼した。

調査結果は、一週間とたたないうちに出た。研究者は、笑いながら言った。

「ビヒヒ。驚きましたよ。ふふっ。あなたの体からは、ぐふっ。高濃度の『笑気ガス』のようなものが、わはは。絶えず出ているようなのです。ククク。だからあなたの、ふふふ。周りにいる人は、フアー。笑いを耐えることができません。私のようにねアッハッハ」

原因は不明。なぜか俺自身には効果がなく、抑える方法は見当もつかないらしい。なんてこった。神様からもらった才能だと思っていたのに、その神様はとんだ疫病神だったようだ。藁井は途方にくれた。テレビに出られないならば、舞台上で活躍すればいいと考え、舞台芸人になろうとしたが、あの正月の一

件以来、藁井の名は芸能関係者の間ですっかり嫌われてしまつたらしく、どこも使つてはくれなかつた。

さらに都合の悪いことに、藁井の才能の原因が笑気ガスだという情報が漏れ、芸能雑誌に曲解され掲載されてしまった。体質だという部分が捻じ曲げられ、笑わせるガスを使って人々を笑わせ、偽りの面白さを演出した悪人のように書かれていた。恐らく、テレビ局と大御所の体面を保つためだろう。

藁井は憔悴しきつていた。絶え間ないバツシング。仕事も金もなく、悩みを友人に話そうにも、みんな笑つてそれどころではなくなつてしまふ。人を笑わせてしまふ藁井には、面と向かつてのコミュニケーションは不可能だつた。電話越しの会話だけでは、孤独感が増すばかり。藁井の心は、今にも引き裂かれそうであつた。

そしてついに、藁井は少しも笑えなくなつてしまつた。もう生きる意味なんてない。死んだ方がましだ。絶望した藁井は、富士の樹海の奥深くに赴いた。右手には、先が輪になつたロープが握られていた。藁井は木に登り、ロープの一端を枝に、もう一端を自分の首に掛けた。そして迷いなく、木から飛び降りた。

藁井の首が締まり、息の根が止まつた。それでももう彼が笑うことはないだろう。

やまだ
山田は人生に絶望した。

会社を首になり、妻と子供には逃げられ起死回生を狙い新た

に会社を興すも、莫大な借金を残し倒産。

もう死ぬしかない。山田はそう決心し、自殺するため富士の樹海の奥深くへと赴いた。

はずだつたのだが。

「ふふつ。はははつ。あーつはつは！ なんだ、全然笑えるはずなのに、笑いがこみあげてきやがつた。なんだこれ。わはは、ぐふつ。腹がよじれる。あはははは！」

こんなに笑つたのは、いつ以来だろうか。なんだ。自分はまだ、こんなに笑えるんじゃないか。死ぬにはまだ早いのかな。あーあ。死ぬなんて、馬鹿らしくなつてきた。山田はさらに笑う。そうだ。もう今より落ちることはないんだ。だつたら、ひたすら這い上がつてやろうじゃないか。

「ははは、あははは、わーつはつは！」

来たときとはうってかわつて、大笑いしながら富士を後にする山田。その姿を、ある腐つた死体は、なくなつた眼球で見つめていた。